

平成17年度公立大学協会図書館協議会研修会

平成17年8月19日（金）

講演③

米国の大学図書館における学習・教育活動支援

アーラム・カレッジの事例をもとに

国立大学法人長崎大学教育機能開発センター

助手 長澤 多代

1. 自己紹介

おはようございます。今日は、米国の大学図書館における学習・教育活動の支援と題して、アーラム・カレッジ (Earlham College) の事例をもとに、現在進行中の調査の中間報告をしたいと思います。

今、ご紹介いただきましたが、私の方からも少し自己紹介をさせていただきます。私は長崎大学の大学教育機能開発センターに所属しています。このセンターでは、学生による授業評価やファカルティ・ディベロップメントなど、教員の教育改善を支援する部門にいます。その中で、教育活動と図書館のかかわりについて検討しています。

このセンターには、高等教育論を専攻する先生が多くいらっしゃるのですが、私は図書館情報学を専門としています。3年前に長崎に来ましたが、まだ大学院に籍を残しています。研究テーマは、「図書館が実施する学習・教育活動を背景とした教員と図書館員のパートナーシップ」です。このテーマで、主にアーラム・カレッジと、ミシガン大学のケース・スタディを進めています。

発表後に質疑応答の時間があると思いますが、意味がわかりにくい場所や聞き取りにくい箇所がありましたら、途中でも結構ですので、ご遠慮なくお声がけください。

2. 発表の概要

本日の発表は、大きく前半と後半からなります。前半には、大学図書館が実施する学習支援の枠組み、ファカルティ・ディベロップメントの基本的な枠組み、米国における高等教育と図書館の動向、歴史的な背景について説明します。

事例紹介の前にこれを説明する目的は、今日、お見えになった皆様に、図書館の学習・教育活動を支援する背景をいま一度確認していただくことにあります。なぜかといいますと、2003年8月から12か月間の米国滞在時に、授業で発表する機会がありました。そこで、現職の図書館員や図書館関係者にFD（ファカルティ・ディベロップメント）について話をしたときに、ほとんどの方がFDの意味をご存じなかったことから、今日は始めにそのお話をさせていただきます。

これまでにファカルティ・ディベロップメントという言葉が聞かれた方はどのくらいいらっしゃいますか。

では、どこで、聞かれましたか。——学内で聞かれた。

FDを実施している大学も多いと思いますが、今日は、その背景的なお話をしたいと思います。

後半は、アールラム・カレッジの事例として、大学図書館が実施する学習・教育支援の現状とその背景をご紹介します。

なお、私の発表では、学生を対象として実施する図書館の支援を「学習支援」と言っています。そして、教員の教育を対象として実施する図書館の支援を「教育支援」と言っています。

3. 大学図書館における学習支援

大学図書館における学習支援については、さまざまな分類があります。最初に、日本図書館協会の図書館利用教育委員会が作成している『図書館利用教育ガイドライン』をもとに、学習支援の段階と各段階における目標と方法についてお話します。これらはお手元に配付資料があると思います。

全体は、印象づけ、サービス案内、情報探索法指導、情報整理法指導、情報表現法指導の5段階からなります。

印象づけの目標は、利用者が、図書館の役割、情報利用技能の重要性について認識することにあります。その方法として、ポスター、チラシ、パンフレットの配布、図書館のサインの設置などがあります。

次に、サービス案内の目標は、利用者が、施設・設備の配置、検索ツールの利用法、図書館員による援助・協力を受けられることを理解することにあります。その方法として、図書館のオリエンテーション、図書館ツアー、配布物やサイン、学内広報誌などがあります。

3つ目の情報探索法指導の目標は、利用者が、情報探索法の意義、検索ツールの利用法、情報検索の原理、レファレンス・サービスの利用法について理解し、習得することにあります。その方法として、レファレンス・デスクでの指導、学科関連指導、パス・ファインダー（情報探索の道しるべ）などがあります。学科関連指導といいますのは、ある科目の学習や研究に必要とされる情報探索法、情報整理法、表現法を指導することです。

4つ目の情報整理法指導の目標は、利用者が、情報の加工、記録法、整理法に加えて、書誌情報の記載法やブレインストーミングなどの発想法について理解し、習得することにあります。その方法は情報探索法とほぼ同じです。

最後の情報表現法指導の目標は、著作権などの情報倫理、レポートや論文の作成法、情報発信、プレゼンテーションの技法について理解し、習得することにあります。その方法は情報探索法指導と同様です。

図書館員が担当するのは、主として、印象づけとサービス案内と情報探索法指導の3つの段階になると思います。ですが、この全体のプロセスを常に念頭に置いておくことが重要になります。次は、ファカルティ・ディベロップメントです。

4. ファカルティ・ディベロップメント

ファカルティ・ディベロップメントは、一般にFDといいます。日本では、教員が授業

内容や方法を改善し、向上させる組織的な取り組みとして理解されています。この全体をFDといますが、そのFDには下位分類があります。FDという教員開発、IDという教育開発、ODという組織開発が含まれます。これらを総称してFDといます。それぞれをご紹介します。

まず、教員開発（FD）は個々の教員の教育スキルの向上に焦点を当てています。具体的な活動として、専門職員によるクラスの観察、コンサルティング、ワークショップやセミナー、ビデオを使った指導スタイルの分析などがあります。

次の教育開発（ID）は、コースやカリキュラムの改善と学生の学習活動に焦点を当てています。具体的な活動として、コースやカリキュラムのデザイン、実施、評価、コースやカリキュラムへの情報や学習スキルの組み入れがあります。

次の組織開発（OD）は、組織の構造や組織内のユニット間、部局間の関係に焦点を当てています。具体的な活動として、大学経営陣や教員とのワークショップ、セミナー、コンサルティング、そして、学科長や学部長を対象にした組織改善の活動などがあります。

米国では、1970年代からFDの重要性が指摘されるようになりました。日本では、1990年代から指摘されています。日本でも、現在では多くの大学が何らかのFDを実施しています。米国では、図書館員など教員以外の職員の資質開発はスタッフ・ディベロップメント（SD）といます。世界的な動向だと思うのですが、日米ともに、職員の資質開発（SD）と教員の資質開発（FD）をあわせて検討することが求められています。

次に、図書館が実施する学習支援や、FDが米国の高等教育史の中でどのように発展してきたのかをたどりたいと思います。

5. 米国における高等教育と図書館

米国の大学史は、ハーバード大学が設立された1636年に始まります。図書館が学習支援を始めたのは19世紀末ですので、ハーバード大学の創設から250年ほどたっていました。

1636年から現在までのうち、特徴的な3つの時期をご紹介します。

まず、ハーバード大学の設立から19世紀半ばまでです。17世紀には、主にイギリスの影響を受けて大学が創設されました。教育の目標は、学生に古い科目を詰め込み、秩序に行儀よく従わせることにありました。授業では、学生はラテン語の教科書を暗記して繰り返し読みました。教科書をいかに正しく読み、翻訳できるかが問題でしたので、内容の検討は問題にはなりませんでした。ですから、教科書以外の文献は必要とされませんでした。図書館を持つ大学もありましたが、図書館が教育上の重要な施設とは考えられませんでした。蔵書計画はなく、収書も偶然的な寄贈に頼っていました。19世紀になっても、多くの図書館では開館時間は週に数時間でした。また、暖房や照明、閲覧スペースもなく、貸出も禁止されていました。

次は、1870年代から1890年代です。当時の学問の中心はドイツでした。ドイツに留学した多くの学生が、帰国後にドイツの大学の理念や制度を米国に導入しました。教育目標は、もはや学生のしつけではありません。学生の知的訓練になりました。授業もドイツ方式で進められます。講義法が基本的な授業法として使用されるようになりました。ほかには、討論法、理系では実験室実習、文系ではゼミナールが導入されました。講義の授業では、学生は教員が話す言葉を一字一句ノートにとりましたが、ゼミナールでは、教員の指導のもとに学生たちが原典を直接調べて討論をするようになりました。そこで、図書館では、蔵書が拡大され、目録法が整備されました。また、開館時間が延長され、学生が書庫に出入りできるようになりました。指定図書制度や図書館の利用法に関する講義を始める大学が出現したのもこのころです。

最後は、1960年代から70年代です。20世紀に入りますと、世界の学問の中心がドイツから米国に移りました。そのために、米国の大学は、教育よりも研究を優先する傾向にありました。1960年代に入りますと、学生紛争が起きました。その中で、学生が学生中心の教育のあり方を大学に求めましたので、大学は学生志向の教育のあり方を模索するようになりました。教育目標は、学生の学習スキルを向上させることになりました。それまで、授業法として、多くの教員が講義法を用いていました。ですが、講義の問題と

して、講義や教科書で示された情報は、しばしば学生に受動的に受け取られること、自分の立場をはっきりさせたり、他人の意見に反対する機会がほとんど与えられないことが指摘されるようになりました。そこで、討論、卒業論文などが導入されました。また、討論の効果を上げるために、リーディング・アサインメンツ（文献課題）が導入され、講義にもそのリーディング・アサインメンツを読んで出席することが習慣づきました。このころから、教育のあり方を検討するためにFD活動が実施されるようになりました。

1970年代には、多くの大学がFD関係のセンターを設立しています。これらのセンターは、1990年代になりますと、図書館や情報処理センターなどと連携して、教員の教育活動や、研究活動を支援するようになっていきます。長崎大学でもこれを参考にして同じような支援を実施しているのですが、米国では、こうした連携型の支援が1990年代から実施されています。

1960年代に戻ります。このころから多くの大学が図書館利用教育を実施するようになりました。これは学生紛争時に、積極的な図書館利用法を指導するように学生から要求があったことによります。このような背景とともに、全国的な図書館団体である、アメリカ大学図書館協会（ACRL）やLOEXという図書館利用教育の専門家団体が図書館利用教育に関する情報交換の場を提供するようになりました。カンファレンスや各大学が支援に用いたテキストの貸し借りを通して図書館利用教育を担当する図書館員の相互の意見交換の場や情報交換の場を設けています。一部の大学図書館では、このころから教員にも図書館利用教育を実施するようになっていきます。

以上のように、教育の内容や方法の変化を受けて、図書館が実施する学習支援や教育支援が発展してきました。

ここまでは図書館の学習支援や教育支援を理解するための背景的なお話でした。次からは、研究の視点、先行研究、米国の事例の紹介をしたいと思います。

6. 研究の視点

先ほども申しましたが、今、私は米国の大学図書館が実施する学習支援や教育支援につ

いて、主に次の3つの視点から検討しています。

1つ目は、「なぜ図書館が学生の学習活動を支援するようになったのか。また、これをどのように支援してきたのか」です。2つ目は「なぜ大学図書館が教員の教育活動を支援するようになったのか。また、これをどのように支援してきたのか」です。3つ目は、「なぜ大学図書館が学内の他部局、他部門と協力して教員の教育活動を実施するようになったのか」です。また、「これをどのように支援してきたのか」です。アールム・カレッジでも、この3つの視点から調査を進めています。

7. 先行研究

最初に、先行研究をご紹介します。

学生の学習支援の研究成果はたくさんあります。ここでは、特に、学生の学習支援を背景として、教員と図書館員の協力関係の重要性を指摘しているものをご紹介します。主な研究にブランスコム (Harvie Branscomb)、ナップ (Patricia Knapp)、ファーバー (Evan Ira Farber)、ブレイビク (Patricia Senn Breivik)、ハーデステイ (Larry Hardesty)、ジェンキンス (Paul O, Jenkins) のものがあります。またの機会に文献や論文を探してみてください。ブレイビクの『情報を使う力』の翻訳版は勁草書房から出版されています。

このうち、ファーバーは本日ご紹介するアールム・カレッジの前任の図書館長です。ファーバーは、アールム・カレッジの図書館で勤務した長年の経験をもとに、図書館員と教員の協力関係の重要性を指摘してきました。1970年代にファーバーの書いた「カレッジの図書館員と大学図書館のシンドローム (College Librarians and the University-Library Syndrome)」という論文は定評があります。この論文では、特に、研究大学において図書館に対する教員の意識に問題があることを指摘しています。ですが、図書館員が資料の収集や整理に力を入れすぎていることにも問題があると指摘しています。

ファーバーは、米国の大学図書館における学習支援の基礎を築いたと言ってもおかしくないぐらいの方です。1993年にアールム・カレッジの図書館を退職されましたが、今でも全国的に有名です。私も調査をしたときにお会いしてお話を伺うことができたのです

が、お話を伺っている最中にも、通りすがりの方がファーバーに親し気に挨拶をしてきたというのがとても印象に残っています。ファーバーと一緒に図書館の中を歩いている時に、知らない人に会うと、ファーバーは自分から自己紹介をして、「あなたはどのような授業を担当しているんですか」と、自然にいろいろな情報を聞き出していました。これが、その後の協力関係の構築につながっているんだなという印象を受けました。このアールム・カレッジは、学習支援を活発に展開させたカレッジとして米国で有名なのですが、この背景には日常的なコミュニケーションを大事にすることがあるなというのを肌で感じる事ができました。

次に先行研究が指摘するポイントを5つにまとめました。1つ目は、図書館の学習支援について検討するには、図書館内の問題を検討するだけでは十分ではなく、カリキュラムや授業、教員や大学関係者など、周囲の環境との関係を検討することが必要になることです。2つ目は、カリキュラムや授業に図書館利用が組み入れられることによって、学生は図書館を利用するようになることです。3つ目は、課題が、学生、教員、図書館員を結びつける重要な役割を果たすことです。レポート課題などが中心になると思います。4つ目は、図書館が実施する学習支援を実質的に機能させるために、図書館は教員と協力関係を築いたり、教員への教育支援を強化する必要があることです。5つ目は、情報化の進展が新しい学習支援を検討する必要性を迫り、教員と図書館員を結びつけようとしていることです。

次からは、図書館における学習支援や教育支援について、アールム・カレッジの事例を紹介したいと思います。

8. アールム・カレッジ

アールム・カレッジは、リッチモンド (Richmond) にあります。リッチモンドは、インディアナ州にある人口4万5,000人の小さな町です。アールム・カレッジは、カーネギーの大学分類 (Carnegie Classification) では、教養カレッジに分類されます。このカーネギーの大学分類は米国の大学について考えるのに重要になりますので、ここで概要

をご説明します。

カーネギーの大学分類は、全米の大学を5つのタイプに分けています。まず、学位授与大学、総合大学、教養カレッジ、2年制カレッジ、専門大学です。学位授与大学は大学院、博士課程まで持った研究大学を中心としています。その中でも規模やこれまでの業績等でⅠとⅡに分かれています。総合大学は、いわゆるティーチング・ユニバーシティと言われますが、教育を中心にした大学です。教養カレッジは、教養教育を中心にした、主に教育を中心としたカレッジです。総合大学のように学部が多くない、教養教育に特化した小規模のカレッジです。2年制カレッジは、コミュニティ・カレッジというのを聞かれたことがあると思いますが、そのコミュニティ・カレッジを中心としています。専門大学は、様々な専門の技能を身につける大学です。ホテルマンを育成する大学など、様々な職種の大学があります。

アールラム・カレッジは、教養カレッジに分類されます。教育水準が非常に高い教養カレッジといえます。全米のランキングでは、教養カレッジのトップクラス（全米69位、2006年）に位置づけられています。地元の方にアールラム・カレッジについて尋ねてみたのですが、一様にすばらしいカレッジだという答えが返ってきます。ある方は、「ハーバード大学の教授がハーバード大学に合格したご子息をわざわざリッチモンドの田舎に来させた。それほどアールラム・カレッジはいい大学なんだ。」と得意気に語っていらっしゃいました。

アールラム・カレッジの創設は、1847年です。設立の母体はフレンズ会です。フレンズ会は、キリスト教プロテスタントの一派で一般にクエーカーと言われます。アールラム・カレッジは、後でも述べますが、教員と図書館員が協力して学生の学習活動を支援しています。その協力関係を築きやすかったのは、クエーカーの教えに平等主義があり、教員と図書館員の地位的格差をほとんど感じないこともあるようです。

アールラム・カレッジは、学生選抜度の高い大学です。新入生の48%は、高校のときの成績が上位20%以内です。学生数は、1学年当たり約300名です。教員数は、通常予

算の雇用は85名ですが、財団等の寄附等によって雇用した教員を合わせますと、約100名になります。アールム・カレッジは教養カレッジですので、教員には教育に従事することが第一に求められます。研究よりも教育に従事してくれと言われるカレッジです。ですから、図書館にも研究活動よりも教育活動の支援が求められています。

このスライド上の写真は、[図書館の正面入り口](#) (写真1568) です。ちょっと見えにくいですが、スロープが入り口の右側にあってバリアフリーに対応しています。

次は、アールム・カレッジの図書館について説明します。

9. アールム・カレッジ図書館

大学が設立された1847年に図書館の業務も始まりました。アールム・カレッジの図書館は、中央図書館であるリリー・ライブラリー (Lily Library) と、サイエンス・ライブラリーがあります。本日はリリー・ライブラリーを中心にご紹介します。

リリー・ライブラリーの建物は、地上2階、地下1階からなります。配付資料にフロア・マップを入れてあります。現在の建物は、1962年の財団の寄附をもとに建設されました。その後、増改築を繰り返して現在の形になっています。

館内には、複数のグループ用演習室があります。1階 (Main Level) では、(マップ中の) 232がグループ用演習室です。このような演習室が館内にたくさんあります。これに加えて、さまざまな用途にあわせた閲覧スペースがあります。集中的な勉強をする場や、リラックス用の読書の場などがあります。写真をご紹介します。

これが1階の232の[閲覧室](#) (写真1552) グループ用演習室です。グループ用の演習室はガラス張りになっています。室外から使用されているかどうか、学生が中で何をしているかを確認することができます。アールム・カレッジには、日本研究の専攻課程があるのですが、これは、[床の間](#) (写真1553) (Tokonoma) というスペースです。図書館の2階にあります。利用者はここに上がって寝ころんで読んだりすることもできますのでリラックスするための空間になっています。次に、これは[閲覧室](#) (写真1561) の一画ですが、奥にはソファがあり、リラックスしてくつろいだ雰囲気でも本を読む場所もありま

す。手前には、グループワーク用の固い椅子があります。様々な利用者の用途にあった机、椅子が用意されていますので、利用者は時々の目的に応じて使い分けることができます。この真ん中にあるのはキャレルです。これは別の場所にあるキャレル (写真1565) です。書架の横にあります。

次はサイエンス・ライブラリー (写真1581) です。こちらは、授業で使っている模型があったり、学生がほっとできるような雰囲気を出すために、いろいろな飾りつけをしています。ここも奥の方はリラックス用のふかふかした椅子がありますし、手前には打ち合わせ用の硬めの椅子が用意されています。特に、新しい椅子というわけではありませんが、いろいろな椅子が用意されています。アラム・カレッジには、芸術、美術のコースもあるのですが、学生が図書館により親しみを持てるように、学生の作品 (写真1582) が壁に飾られています。そうしますと、この作品を見にくる学生がいるそうです。また、学生がこの図書館づくりにかかわっていることを他の学生に印象づけることができるため、学生が図書館に親しみを持つための重要な方法だと考えられています。

この写真はグループ学習室の予約表 (写真1583) です。ドアにアルミの板があり、予約がありますと、予約された時間が記された紙片をセロテープで張ります。部屋が空いていれば、誰でも自由に勉強したり、話すことができます。

この写真はリリー・ライブラリーの新設された部分です。中央図書館の正面から入って奥に行った所ですが、ここにもキルト (写真1587) が飾ってあります。これも学生が授業で作ったもので、何ヵ月かに1回ずつ張り替えているようです。飾られた作品を見に来る学生もいるそうですので、学生がなじみやすい空間づくりが工夫されています。

学習支援の場所として、1994年に閲覧室の一面に演習用のスペース (写真1662) が設けられました。このスペースには、中央に大きなテーブルがあり、周囲の壁沿いにコの字型に20台のコンピュータが設置されています。普段は学生がコンピュータを使って勉強しているのですが、図書館員が学習支援をするときには、天井に設置されたスクリーン (写真1549) を引き出して、演習室用のスペースをつくり出しています。普段は参

考図書室とつながっていますが、スクリーンで仕切ることによって、部屋のような空間ができます。

アールラム・カレッジの図書館には、14人の図書館職員がいます。学内の情報サービスの機構は配付資料にあります。カレッジ内の情報関連部局が、情報サービスという機構に数年前に統一されました。この中に図書館があります。図書館には、図書館長とレファレンスや指導を担当する専門の図書館職員、ここでは図書館員と言っていますが、6名の図書館員がレファレンス・インストラクション・ワークに所属しています。そのほか、図書館業務を支援するスタッフが約7名います。専門職としての図書館員は、レファレンス・ライブラリアンや、サブジェクト・ライブラリアンと呼ばれ、歴史や文学、地理学など、担当する専門の学問領域を持っています。ウェブ上にスタッフ紹介のページがあります。

<http://www.earlham.edu/~libr/library/staff.htm>

アールラム・カレッジではありませんが、ミシガン大学のウェブページでは、図書館員が担当する学問領域の情報も提供しています。例えば、「この図書館員は地理学を専門としている」などの情報が示されています。大学によっては、「心理学についてはこの人に聞きなさい」など、詳細な情報が載せられています。アールラム・カレッジでは、どのような図書館員がいるのかという情報と連絡先を紹介しています。

アールラム・カレッジでは、図書館員はファカルティの一員とみなされています。地位はアドミニストラティブ・ファカルティ (Administrative Faculty) です。一般に日本で言う教員はティーチング・ファカルティ (教育を担当するファカルティ) です。そのティーチング・ファカルティとは異なる大学の業務を担当する専門職員として、アドミニストラティブ・ファカルティがいます。他にアドミニストラティブ・ファカルティの地位をもつのは、コンピュータの技術職員、ディベロップメント・オフィスの専門職員です。

図書館員は、館内に個室を持っています。米国では、多くの大学図書館員は個室や個室のようなスペースを持っています。先程のフロア・マップのうち、218が図書館員の部屋です。他にもあります。利用者は、質問があると、この図書館員の部屋をたずねること

ができます。部屋の中は広くなっていて、本棚もあります。図書館員はこのようなスペースを一つずつ持っています。私のいたウエイン州立大学やミシガン大学では衝立で仕切っています。上は空いていますが、広さはアールラム・カレッジのものと変わりなく、個室のようです。

図書館員は、通常は図書館内の業務をしています。学内の委員会の委員になったり、授業を担当しています。授業の準備と通常業務のやりくりが大変だということですが、授業を担当する部局で、教員と知り合う機会もあり、その後の学習支援に結びついたりしているそうです。

アールラム・カレッジの図書館は、図書館が実施する学習支援のモデルとして、全米で最も有名な図書館の一つです。先ほどご紹介した前任の図書館長であるファーバーが学習支援を活発に展開して、多くの大学に影響を与えました。現在のカーク（Kirk）館長もこれを継いでいます。この活躍が認められて、カーク館長は 2004 年にアメリカ図書館協会（ALA）の優秀図書館員(the 2004 ACRL Academic / Research Librarians of the Year) に選ばれています。

次は、アールラム・カレッジにおける学生の学習支援の現状をご紹介します。

10. アールラム・カレッジ図書館における学生の学習支援

学習支援の目標には、短期目標と長期目標があります。短期目標は、学生がよりよく課題をしたり、独立した学習者となるように支援することです。長期目標は、卒業後の情報社会でよりよく生きられるように支援することです。学生は、4年間を通してさまざまな学習支援を受けます。現在の支援体制が整備されたのは、前任の図書館長が着任した 1963 年以降です。1960 年代のうちに、図書館ツアーや図書館関係の講義に加えて、図書館利用クイズ、学科関連指導が実施されるようになりました。その後、情報通信技術の発達やカリキュラムの改定等を取り入れて、新しいプログラムを開発しています。

次は、個々の学習支援の内容をご紹介します。

まずは「図書館利用クイズ」です。アールラム・カレッジの図書館では、学生のもつ図書

館や情報探索の知識を確認するために、新入生を対象にクイズを実施してきました。アーラム・カレッジでは、新入生オリエンテーションのときに、習熟度別のクラスを設定するために、数学や英語のテストが実施されています。図書館利用クイズもこれらのテストと一緒に実施されていました。クイズの主な内容は、カード目録やコンピュータ目録から著者名、書名、出版社名等を読みとることです。例として、そのテストの一部を配付資料につけておきましたので、ごらんください。(テストの)上半分がコンピュータ目録の画面で、下半分が質問と回答欄です。問題1は、コンピュータ目録の画面から著者名を読みとるものです。著者が何年に生まれたという情報の中にありますので、これを読みとります。このようなクイズを通して、学生が目録を読み取ることができるのかを確認します。1回あたりこのような問題が2つぐらいあります。クイズの得点が低い学生には、補習をして底上げを図っていました。1学年は約300名で、通常1割ほどいたということですから、約30名が補習の対象となっていました。

最近では、高校によってコンピュータ目録のインターフェースが異なりますので、学生の知識を一つのテストで確認することが難しいと考えられるようになりました。ですから、2002年にクイズが廃止されています。今では、クイズの代わりに学内ネットワークの利用法について説明する「情報利用ガイダンス」が実施されています。

次は、「学科関連指導」です。学科関連指導は、主として、レポートや発表が課されているクラスで実施されています。個々の課題に必要な情報資源をどのように探索するのか、その方法を助言するオーダーメイド型の学習支援です。学科関連指導では、課題のテーマに関する参考図書やデータベースが紹介されます。この指導は、図書館員全員と図書館長が担当しています。アーラム・カレッジの図書館のウェブ上には、クラス用のページが公開されています。もちろん、クラスの中で口頭で説明するのですが、説明用の資料としてこのページを公開しています。学生は学科関連指導を受けた後も、いつでもこのページを利用することができます。

学科関連指導が始まった理由は、前任の図書館長が、数日の間に同じレファレンス質問

を繰り返し受けていることに気づいたことがあります。そこで、その課題を出している教員を学生にたずねて、その質問事項の内容をクラスで説明したいとクラスの担当教員に申し出ました。この試みが、学生と教員ともに評判がよかったものですから、ほかの科目でも広く実施するようになりました。また、ほかの図書館員も実施するようになり、今でも多くの科目で実施されています。

アールラム・カレッジの図書館では、学科関連指導をする際の利点と欠点を次のように考えています。

まず、利点です。1つ目は、科目の指導内容や方向に即した指導ができることです。一つひとつの科目を支援しますので、テーマを特定した支援ができます。2つ目は、個別の科目を支援していますので、カリキュラムの改定や学内政治の問題を引き起こさないことがあります。3つ目は、教員次第、学生次第で柔軟な対応ができることがあります。

次は、欠点です。1つ目は、全教員がそのサービスを利用しているのではないことです。2つ目は、多くの授業で実施していますので、内容について幾らか重複する部分が出てくることです。3つ目は、教員の協力状況に左右されることです。

このように、全クラスを対象とした支援ではありませんが、協力的な教員のクラスから支援をするなど、実施しやすいところから個々のニーズに応じた支援を実施しています。

また、実施する時期が重要だと考えられています。レポート作成の課題がある場合にも、レポートの作成が始まる少し前に支援が実施されています。図書館員の話によれば、学生は必要とするとき以外は情報利用に関心がないので、学期の始めにしても効果がないということでした。支援のタイミングが重要になりますので、レポート作成の課題をもつクラスには、レポートを作成する直前に支援するそうです。

次に、図書館員が個々のクラスを支援するのにどのような準備をしているのか、そのプロセスをご紹介します。

まず、ウェブ上に公開されている講義要綱を入手して、担当分野の科目の中から図書館を必要とする科目を抽出します。担当分野の科目といいますのは、例えば、歴史学を専門

とする図書館員ですと、歴史学の講義要綱を対象とします。その中で、具体的には発表やレポートを課している科目を抽出します。次に、これらの科目を担当する教員に、電話や電子メールで図書館員の支援が必要かどうかを確認します。教員が学習支援を必要とする場合には、その科目のシラバスを送ってもらいます。日本では、科目の概要を記す分厚い資料をシラバスと呼んでいますが、米国ではあれはシラバスとは呼びません。これは講義要綱に該当するものです。シラバスは、6枚ほどのプリントで、毎週何をするのか、どのような文献を読んだらいいのかが記されています。成績評価もかなり細かく書いてあります。提出が1日遅れたら5点引くとか、そこまで書いてあります。このような科目の目標などを、細かく記した6ページぐらいのものをシラバスといいます。ですから、最初に講義要綱を見るというのは、日本で言う分厚い授業の概要を記した科目の情報を見ることになります。次に、教員が学習支援を必要とするという場合には、6ページぐらいのより詳細な情報が載ったシラバスからより詳しい情報を得ることになります。

次に、図書館員は、シラバスを読みながらクラスに必要な資料やデータベースを検討します。場合によっては、より詳しい情報を得るために、教員にもう一度電話をしたり、実際に会って内容を確認します。

次に、シラバスや話し合いをもとに、クラス用の情報リストを作成します。そして、関連するデータベースへのリンク等を張り、このリストをウェブ上で公開します。科目によって、多少フォームが違いますが、それぞれの項目からリンクを張っています。学科関連指導を実施するクラスには、クラスごとにこのようなページが作成されています。実際のクラスでは、このページを紹介しながら、参考図書やデータベースの利用法について説明します。

図書館員に、「どれぐらいの時間で準備するんですか」と聞きました。講義要綱の入手からウェブページの作成まで平均して3～4時間ということでした。初めて担当する科目は、もう少し時間がかかるそうですが、一般に3～4時間、慣れれば1時間ぐらいでできるそうです。準備に一番時間が必要なのは、ウェブページの作成だそうです。各図書館員は、

1 学期に平均して約 20 科目を担当しています。

これまでは学生を対象とする学習支援についてお話してきましたが、次は教員を対象とする教育支援についてお話しします。

1 1. アーラム・カレッジ図書館における教員の教育支援

教育支援の目標は、教員が図書館の教育支援機能について理解を深めること、情報資源を活用して授業を準備できるようになることにあります。図書館が実施している学習支援を教員に印象づけるために、1970年代から前任の図書館長のアイデアをもとに、さまざまな教育支援が実施されてきました。主なものに、教員採用候補者との面談、新任教員への手紙の送付、新任教員オリエンテーション時の説明があります。近年では、教育用ソフトウェアの利用法や情報資源を活用した課題の設定法に関するワークショップも実施されています。2003年度にカリキュラムが大幅に改定されましたので、新しいカリキュラムに対応したワークショップが実施されています。

次は個々の教員支援の内容をご紹介します。

まず、教員採用候補者との面談です。教員採用候補者を対象にした面談は、候補者が就職の面接でキャンパスを訪問するときに、図書館長が候補者に図書館サービスについて説明するものです。この支援の始まりは、前任の図書館長が、カレッジの関係者が候補者にキャンパスの案内をしていますので、それに便乗して図書館も案内をしてはどうかと提案したことにあります。

ここで、米国の一般的な教員の採用法についてご説明します。事前に業績や、履歴書等の関係書類を大学に送付して、書類審査をクリアした候補者と大学関係者が面談するところまでは日米に変わりありません。その次に、日本では会議室等で数名の面接官と数10分の質疑応答をするのが一般的です。ですが、米国では、プレゼンテーションに加えて、学部長その他の大学関係者との面接を通して、候補者の教育の考え方、教育経験の有無や程度、授業担当を希望する科目等について話し合います。また、ここが日本との最大の違いですが、候補者は大学に就任条件を提示して交渉します。交渉内容として、地位・階級、

俸給、教育・研究の環境以外に配偶者等の就職があります。そのためにキャンパスを数日間訪問するのが一般的です。

本題に戻ります。アールラム・カレッジの図書館における候補者との面談の目的は、図書館が教育面で重要な役割を果たしていることを候補者に印象づけること、候補者と図書館員が顔見知りになるきっかけをつくることがあります。面談を担当するのは主に図書館長です。図書館長は候補者がカレッジに送付した履歴書等を事前に読んで面接に備えます。実施の手順は次のとおりです。候補者を持つ部局の秘書から図書館長に「候補者がキャンパス訪問に来ますよ」という連絡が入ります。そこで日時を検討します。候補者がキャンパスを訪問するときには、図書館長は図書館のサービスについて約30分ほど説明をします。場合によっては、館内のツアーもします。候補者の多くは大規模な研究大学出身の方が多いので、担当者は大規模大学とアールラム・カレッジのような小規模大学との違い、特にコレクションやサービスの違いについて説明したり、アールラム・カレッジの図書館では学生の学習支援を積極的に実施していることを伝えます。

次は、新任教員への手紙です。新任教員への手紙は、着任が決まった教員に送付される図書館のサービスを紹介した手紙です。手紙を送付する目的は、図書館がいつでも教員を支援する準備があると伝えることにあります。前任の図書館長が、「新任教員が手紙をもらったらうれしいんじゃないか。」と考えたことに始まりました。ほかの部局では、このような手紙を送付する習慣はないそうです。図書館長は、教員が着任した情報を部局から受け取ると、この手紙をその教員に送付します。手紙では、「必要な文献等があれば、すぐに図書館に連絡をください。」と伝えています。ですから、手紙を受け取ってすぐに図書館に連絡を入れる教員もいます。返事がないことも多いそうですが、新任教員がアールラム・カレッジにかかわる早い段階で図書館を印象づけることが重要であると考え、このサービスが続けられています。

図書館長が送付している手紙と並行して、新任教員と同じ専門分野を担当する図書館員が学習支援の案内、専門分野の資料やデータベースの情報を電子メールで送付しています。

次は、図書館オリエンテーションです。図書館オリエンテーションは、新任教員のオリエンテーションの中で、図書館がサービスの全体像について説明するものです。前任の図書館長が、カレッジのオリエンテーションで図書館の説明をする機会を設けるように働きかけたのが始まりです。その目的は、新任教員が図書館のサービスや機能についてどの程度理解しているのかを確認すること、アラム・カレッジでは図書館が教育に深くかかわっていると印象づけること、図書館が学生の支援についてどのようなビジョンを持っているのかを教員に伝えることがあります。オリエンテーション全体のプログラムは、インディアナ州やリッチモンドという地理的な背景、アラム・カレッジの歴史や文化の説明です。これに加えて約1時間、図書館長が図書館のサービスについてウェブページを使って説明したり、図書館ツアーを実施しています。

最後は、新カリキュラム支援のワークショップです。このワークショップでは、2003年にカリキュラムが大幅に改定されたことを受けて、新科目の課題やその指導法について、教員と図書館員が一緒に検討します。ワークショップの目的は、教員が情報資源や課題の設定について理解を深めること、教員と図書館員、そして教員間の情報交換の場をつくることにあります。教育コミュニティをつくっているのだと思います。ワークショップは、夏休みに1日規模で実施されます。参加者はブレインストーミングや討論を通して、新しい情報資源と新しい課題、剽窃（ひょうせつ）について理解を深めました。教員のスケジュールを考えて、同じ内容のプログラムを日を変えて3度実施しています。各回ともに約10名の参加がありました。ワークショップの内容に剽窃を入れた理由は、レファレンスやその他の機会に、教員から学生の剽窃について質問や不満を何度も受けていること、図書館情報学の分野の主要な検討課題であること、学生が剽窃の知識を持っていないことがあります。ワークショップは、2名の図書館員が担当しています。2003年の5月にこのワークショップを観察する機会がありましたので、簡単にご紹介します。ワークショップは先程ご紹介した学習支援のスペースで実施されています。ワークショップでは、まず、教員が指導上の困難を提示していました。図書館員は、学生が情報探索時に失敗しやすい

点等を指摘しながら、課題の設定、データベースの選択法、学生にアドバイスする方法について説明をしていました。1日規模のワークショップでしたので、昼食も準備されていました。昼食は参加者全員でいただきます。昼食中にも、リラックスした雰囲気の中で、授業のあり方や学生の態度などについて情報が交換されていました。ワークショップの参加者は、1日分の給与と交通費を図書館から受け取ります。この費用は、前任の図書館長が退職するときに設立したFD基金(Farber Faculty Development Fund)が負担しています。なぜかといいますと、米国では、一般に教員は夏休み中の俸給は受け取らないからです。一般に、1年に10ヵ月分の俸給しか出ません。夏休み中に教育改善のワークショップに参加することは、教員が教育活動をしていることを意味しますので、何らかの財政的な支援が必要となります。そこで、前任の図書館長が退職するときに設立した基金がその経費を負担しています。

最後に、アラム・カレッジの図書館が実施している学習・教育支援のポイントを整理します。

12. アラム・カレッジ図書館における学習・教育支援の特徴

まず、レファレンス質問をもとに、学内のニーズを把握して、学習・教育支援を始めた。その内容を検討しています。これは学科関連指導など新しいサービスを始めるきっかけになったり、教員対象のワークショップで剽窃について検討するなど、プログラムの内容に反映されていることからわかります。

次に、図書館員の専門分野をもとに、教員やクラスにアプローチをしています。

次に、必要な支援を必要とするタイミングで提供しています。

あと、教員が学生の図書館利用に決定的な役割を果たすと考えて、教員への印象づけを繰り返し行っています。

次に、教員、学生、図書館員が支援活動や日々の業務の中で顔を合わせる機会を増やしています。顔見知りになることが両者のコミュニケーションを促進して、その後の支援や、協力関係の構築に結びつくと考えられています。

あと、学内の行事に参加することがあります。これは、これまでに学内で実施されていた行事の一環として、図書館利用クイズ、教員採用候補者への面談、新任教員へのオリエンテーション等を始めるようになったことに反映されています。

以上の事項は、日本では実現の可能性が低いものもありますが、今後の支援を検討する上で、何かしらのヒントは得られると思います。

最後に、配付資料として、高等教育と図書館に関する文献や団体の一覧表をお配りしておりますので、簡単にご説明します。

13. おわりに

まず、一番お伝えしたいのは、「大学図書館の学習支援関係の団体及び文献」です。日本図書館協会の図書館利用教育委員会が『利用教育通信』を出しています。これは無料のウェブ・マガジンですので、登録をしてどうぞ利用してください。このマガジンには、文献リストが掲載されています。情報利用教育や情報リテラシー、学習支援に関する文献リストを大学図書館、学校図書館、公共図書館など館種別に紹介してくださっていますので、役に立つと思います。

そして、先程一部ご紹介しました『図書館利用教育ハンドブック』、京都大学の授業で使われている『大学生と「情報の活用」・情報探索入門』があります。

高等教育関係の団体と文献についてもご紹介しています。『大学教育学会誌』は、もともとは『一般教育学会誌』ですので、特に、教養教育の問題を取り扱っています。実践を中心とする発表が多いのが特徴です。

あと『IDE』という雑誌があります。これは月ごとにテーマが違います。FDのときもあれば、教員の組織のあり方、学部教育、ITという月もあります。短い記事が多くありますので、読みやすいと思います。ですから、高等教育の情報を簡単に得るためには、『IDE』から読み始めるのもいいかなと思います。

あと、玉川大学出版部や、東信堂から多数の高等教育関係の文献が出ていますので利用してください。もし、「こういうテーマの高等教育関係の文献が読みたい。」というご要望

がありましたら、わかる範囲でご紹介しますので、今でも後でも申し出ていただければと思います。

私の発表は、以上で終わります。

今から質問を受けつけますが、後日、何かありましたら、連絡先をスライドの最後に載せてありますので、いつでもお尋ねください。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)

事務局 ありがとうございました。

ご質問をお受けしたいと思いますが、どなたかございませんか。

——いらっしゃいませんか。

——それでは、講演の方はこれで終了させていただきます。

ありがとうございました。もう一度拍手をお願いいたします。

(拍 手)

終 了